不定芽

内村鑑三先生と自然科學

札幌農學校で内村鑑三氏を基督教に引きいれたのは、上級生であつた私の父である。しかして父と内村氏とは、幽明界を異にするまで無二の親友であり、五十有餘年間の心の友であつた。「昔僕が君の家をたづねた時、產婆が來て君の母さんの腹をさすつて居たよ。その時の子供が君だからナー」とは、私の顏を見るたびに先生ではない内村の小父さんが大きく笑つて述懷される言葉であつた。

高等學校を卒へて理科大學に入學した私が、はからずも動物學に志ざすと聞いた小父さんは、ある日私を書齋に呼びいれてありし昔を語りだした。「僕は札幌農學校を卒業した當時、日本の生命は水產にありと考へた。そこでまづ農商務省の役人になつて重要魚族の研究に着手した。最初上司から命ぜられたのがフグの調査であつた。僕は一生懸命でやつたよ。粉骨碎心の結果は殆んど間然するところなき報告となつて上司の手許に提出されたが、君よく記憶してくれ給へ、水產界の元老といはれた上官が、それを奪ひ取つて己の業

績として發表してしまつたよ。眞面目にやつた僕は上役にしてやられたのだ。僕の怒は心頭から發したよ。そして水產學をサラリと投げだしたが、今でもフグを見ると腹が立つ。君は僕の棄てたものを拾つてくれるのか。有難い。大にやるべし。然し大きな面をしてをさまつてゐる泥棒には十分に備へよ」と。

又ある日のこと、同窓の親友宮部金吾博士を引き合ひに出し、「いつぞや宮部が僕を實驗室に連れ込み、面白いものが見えるとて顯微鏡をのぞかせた。見終つた僕は顯微鏡下にヒューマニティーは見えぬかと質問した。ところが驚くではないか、信じきつて居た宮部が、そんなものが見えてたまるものかとカラ〳〵笑つて僕を一蹴した。顯微鏡下に神の國が見えないなら學問はやめた方がよい。君わかつたか」と、一段と力をこめて語られた。

内村の小父さんの書齋には、宗教書と共に魚學の本が幅をきかせてゐたのを知る人は少なからう。彼は思索に疲れた頭を常に自然科學でいやしてゐたのである。それを知つてゐた私は、時折自らの研究論文や著書を送つてゐたが、讀破して見た小父さんは、あのむづかしい顏に笑を浮べ、我が子に對するが如き態度で感謝の意を表された。

不定芽

私の仕事を理解し、常に精神的に鼓舞することを惜しまなかつたよき指導者は、善戰よく宣教者としての務を果してにはかに姿をかきけした。星は落つ秋風五丈原とでもいはうか、基督教界の巨星既に墜ちて轉た寂莫の感を深うする。

我等の夏目先生

文豪漱石としてその名天下に著聞するに至つた猫の主人も、我等が一高で初めて御目にかゝつた頃は、單なる英語の先生夏目金之助教授であつた。揚げ足を取つたり取られたり兎に角白線帽の三年間ロンドン仕込みの英語できたへられたのであるから我等に取つてはどこまでも恩師夏目先生である。ホトトギスにロンドン塔が現はれ、猫が漸く世に姿を見せた頃、云ひかへれば明治卅五六年頃の先生は、羽化して漱石となるべく、自らつむいだ美はしい繭の中に閑居してゐたのであらう。云はゞ蛹であつた時代の夏目先生に親しく英語を習つた教へ子の一人として、今茲に漱石ならぬ夏目金之助教授の風貌を描いて見る。

博士の辭書

明治卅五年の九月、天下の秀才の一人となつた筆者は、初めて一高の教室に踏み込んで所定の机に腰を下ろしたが、所謂分館と號した平べつたい建物の教室が、中學のそれに比して如何に汚なかつたことよ。三年生になるまで時計臺のある赤煉瓦の本館に席を占める

不定芽

資格がないとのことで、幾多の博士の卵が麻つたらしい傷だらけの座席に落ちつかねばならぬことゝなつたが、カン〳〵〳〵と鳴り響く鐘の音と共に、教室のドアーをあけて無雜作に教壇に立ち上つた英語の先生の姿が、中學校の諸氏彼氏に引き較べて、如何に垢抜けがしてゐたことよ。

生粋のロンドン仕立てとでも云ふのであらうか、驚がゝつた鼠の背廣がピタッとその身についてゐる。顏一面にあばたが散在してはゐるが、髮をきれいに分けて、アイロンでもかける身だしなみがあるのか毛の先が心持ち捲き上つてゐる、そして上着のポケットから白いハンカチーフの三角のはしがチラッと顏を出してゐるその調子のよさ、教室の見苦しさに引きかへて、高等學校の先生は役者が一枚上だナと云ふ感が起ると共に、その威容に押されたのか、一同片唾をのんで教壇を注視した。これが初めて我等と顏を見合はせた夏目先生であつた。ロンドンから歸つたばかりの夏目教授の姿であつた。

無雜作に出席簿を讀み上げて、扨て先生が頁を開いたのは、特に理科の生徒のためにと撰ばれたサイエンスリーダーと云ふ本であつた。行儀よく並んだ生徒の顏を一わたり見廻

はして、「火山の噴火」と云ふ章をいきなり讀み初めたが、その發音の正確で垢抜けがしてゐること、感ばかりを聞いたら誰がこれを日本人と感づかう。いや味のない典型的な英國紳士の口をついて出る申分のないその英語、我等は夏目先生に威壓された態で最初の一時間を夢のやうに過してしまつた。

スタートで氣合負けがしては、生徒は徹頭徹尾敗戰の憂き目を見なければならぬ。時を重ねる毎に夏目先生の突擊は猛烈さを加へて來た。そして生徒の誤譯を耳にする毎に、

「オイ〳〵待つた待つた。そんな譯はどこで見つけて來た」

ときまつたやうに追究する。

「辭書に書いてあります」

と生徒が答へると

「博士の書いたちつぽけな英和辭書だろう。駄目々々」

とまつこうからこき下ろす。

その頃世に行はれてゐたのは、文學博士何某博士イーストレーキと云ふやうな名

を連ねた赤い表紙の小さな英和辭書であつた。これより他に頼みにするものゝなかつた生徒どもは、お面を取られたりお胴を打たれたり、日々散々に打ちのめされてゐるうちに、めくる頁の數がドシ〳〵と重なつて來た。こんなに進められたら試驗が思ひやられると心配し出した生徒軍は、やたらに質問を發しては課業を進ませない手段を取り出したが、百戰練磨の夏目先生がどうしてその手に乘せられやう。快刀亂麻を斷つが如く愚にもつかぬ質問を受け流してはドシ〳〵授業を進めてゆく。これではたまらぬと騷ぎ出した生徒が額を集めて對策を練つた結果、適當な選手を押し立てゝ、十分間でよいから先生の授業を止めて見せやうと云ふ案を立てた。

その役目を負はされた筆者は、とつおひつ思案投げ首の態であつたが、つと名案を思ひ浮べて、その夜圖書館へと駆け込んだ。そしてウエーブスターの大辭書を借り出して、脳命に譯讀の豫習に取りかゝつた。そのうちにソール（sea）と云ふ字が出て來たが、その場合「足裏」と譯すのが適譯であつた。然し「したびらめ」と云ふ魚名と考へて無理にこちつけると何とか文意がまとまらないこともない。これこれとひそかに快哉を叫んだ筆者

は、早速その譯を書き取つた。そしてその翌日胸に秘を蔵して夏目先生の時間を待つた。策戰通り名ざされた生徒が「やつて來ません」とお辭氣をした。次とお鉢を廻はされた生徒もお辭氣をした。

「それでは O 君!!」

と筆者が名ざされた。どし〳〵譯をつけて愈々問題の場處に來たので、わざと聲を張り上げ「したびらめが……」とやり出したら、早速例の「待つた待つた」が先生の口をついて出た。

「O 君!!　そんな馬鹿な譯がどこにある」

「辭書に書いてあります」

「また博士の小辭書だらう」

「いゝえ先生、大きな辭書に書いてあります」

「何と云ふ辭書だネ」

「ウエーブスターの大辭書です」

我等の夏目先生

不定券

「馬鹿を云つては困るよ、それなら君、一寸本館の教官室へ行つて、僕の机の上にあるウェーブスターを持つて來給へ。そして君が見たと云ふ譯を見せて貰はう」

分館の教室から本館の教官室までは相當の距離がある。往復に十分はかゝると目算をたてた筆者は、赤い舌をペロリと出しそろり〳〵と歩を運んで、大辭書をかゝえて來た。

「どれどこに君の云ふ譯がある、サアあけて見せた見せた」

「先生これです」

と昨夜圖書館で見て置いた個處を指して示した。

「何だと、ソールとは平目の一種だと、して見れば君の見つけた譯も滿ざらうそではないが、よく眼をあけてその上にある譯を見た。足の裏とチヤーンと書いてあるだらう、辭書を見て適譯が拾へないやうな男はさしづめ注意點だナ

よし、よし、もつと先を讀んだ讀んだ」

約束の十分はとうに過ぎ去つた。級友は俳味を帶びた夏目先生の顏を見上げてドツと笑ひこけた。さすがの先生もこの時ばかりは狐につままれたやうな顏をして教壇を去つたが

今初めてかゝるわなにはまつたと聞き知つたら、地下にゐます漱石先生は何と申さるゝことであらう。

大根問答

今は立派な人物になつてゐるSが譯讀を命ぜられて先づリーディングを初めたが、プレザント（pleasant）と云ふ字をプリーザントと讀み上げた。そうしたら教壇から「待つた待つた」と云ふ聲がかゝつた。

「S君!! 今のところをもう一度讀んだ」

と夏目先生が仰せられた。命に應じてSは又もやプリーザントと讀んだのでロ髭をひねり上げてゐた先生は

「S君!!」

と彼を呼びとめた。そして

「君！ それはダイコンをデーコンと讀むが如し、さあ先を讀んだ讀んだ。」

と云つたまゝすました顏をして先を急がせた。Sは何のことか先生の言がわからなかつ

不定芽

たと見えてキヨトンとした顔で立往生をしてゐたが、そのSは今日帝都の中央に巣を構へてブリーザントとデーコンとの關係を永久な解き難い謎と心得てすましてゐる。

江戸の敵を長崎

夏目先生は「やつて來ません」とお辭儀をしても決して怒らない良い先生であつた。出席簿をつけてから、毎時間きまつたやうに一番隅の席席の生徒を指す。

「やつて來ません」

「次ぎ」

「やつて來ません」

「次ぎ」

「やつて來ません」

次ぎ次ぎ次ぎと全生徒が將棋倒しにお辭儀をする時間が五分はかゝつたらう。最後のお辭儀を見屆けた夏目先生は、

「それでは僕がやるから聞いてゐたまへ」

と云つて、鮮かな發音で讀み上げては譯をつける。夏目先生の英語は下讀みをしないでよいものと相場を踏んだ生徒一同は、一學期を通じてお辭儀を仕通したが、とかうするうちに試驗がやつて來た。問題はやさしかつた。筆者の如きは確に百點と云ふ自信を持つて答案を認めた。

次の學期の初めに閻魔帳を持つて教壇に姿を現はした夏目先生が、「これより注意點を讀み上げる」と宣告して、あばたづらに微笑を浮べながら負傷者の名を呼び出した。首席の男二番の男三番の男、驚いたではないか全級すべて落第點であつた。

「さあ又初めるぞ!!」

と先生は一言も生徒の不勉强に言及しないで本を取りあげたが、寢首をかゝれた生徒は猫の主人の辛辣さに避易した。そしてその後は「やつて來ません」と云ふ聲を全く封じ込めて懸命に努力した。

授業を休まない辯

學年の終り近くに教科書があらかた片づいたので

不定芽

「先生!! もうよい加減に休んで下さい」

と生徒側から申し出た。

五つ紋の黒の羽織に袴と云ふ出でたちの先生は、椅子に腰を下ろし、教卓に頬杖をついて生徒を見下ろし

「僕も休みたいがネ……」

と俳味を帶びた口調で語り出した。

「休むからには足腰を延ばして朝湯にもはいりたいさ。手拭を下げてたゞ家へ歸るのもつまらないから、その足で梅月(その頃一高附近で菓子を喰はせた家)へ行くとしやう。お茶を入れてすきな栗まんをつまんでゐるところへ、僕が出勤しなければ君達も休だから、誰かゞそこへやつて來るだらう。生徒とにらみ合つて菓子を喰つたんじやうまくないから梅月も朝湯もまつた學校を休むことも僕はやめる。

それに手拭を下げて落雲館中學のあたりを歩いてゐると、頤に鬚の生えてる人(當時の一高校長狩野亨吉博士)に出くはすから、一日身をかゞめてゐなければならないからネ!

僕は頤に鬚の生えてゐる人はこわいよ。そして窮屈な思をして家にかゞんでゐるのは嫌だ。だから休むのはいやだよ。さあT君今日のところを讀んだ」

夏目先生にかゝつては如何な一高の健兒も双向ふすべがない。何と云はれても突込む余地が無かつた我等の夏目先生は、後年果して漱石と銘を打つて廣い世界に躍り出た。その作品を手にする毎に我等の眼には恩師夏目先生の姿が浮び出る。そしてウエーブスターをかつぎ出したその當時の光景が、走馬燈の如く廻り出る。